



# 東洋史学研究室

～アジア・アフリカの歴史を学ぶ～

1. 東洋史学研究室紹介
2. 教員紹介
3. ゼミ・講義案内
4. 履修の手引き
5. 留学体験記

# 1. 東洋史学研究室紹介

はじめに、東洋史学研究室で学ぶ意義や具体的に学ぶことができる内容・対象とする領域などを紹介します。

## \*東洋史学研究室概要 (2021 年度)

教員 6 名、教務補佐員 1 名

学部生 29 名

大学院生 (修士課程 5 名、博士課程 18 名)

## ○東洋史学研究室での学び (東洋史学研究室 HP より)

### 1. 東洋史学の魅力

東洋史学 (アジア史) のおもしろさ、それはアジア社会がもつヴァイタリティー、それと表裏の急激な社会変化、そして今後の世界を変えていく可能性にある。アジアの魅力は、アジア社会に一步でも足を踏み込んだ経験をもつ者であればすぐに感ずるであろう。喧騒と色彩と匂いのあふれる街路、水と光と草原と雪と日差しの極限から極限までのスペクトル、伝統と現代との整理のつかない混雑…。そのいずれもが、人をアジア社会に引き寄せ、好奇心をあおり、不安感を増幅させ、そして知的冒険心を掻き立てるのだ。

東洋史学が対象とするこのようなアジア社会は、落ち着き安定したヨーロッパ社会とは異質なものである。したがって、その社会へのアプローチも定まったものがあるわけではない。たとえば、後に個別に紹介するように、佐川教授は都城の遺跡を中心に中国各地や韓国で調査を行っている。吉澤教授は、沿海部都市と内陸とのギャップから中国全体を見渡している。また、島田准教授はインドのスーラトや東南アジアのジャカルタなど、かつての国際貿易都市を調査し、南・東南アジアと世界がどのように結び付いていたのかを考察する。守川准教授は、西アジアや中央アジアの聖者廟や墓地を中心に、宗教と社会の関係を捉え直そうとする。これらのフィールドに、スタッフはしばしば足を運び、場合によっては学生が同行する場合もある。つまり東洋史学研究室のスタッフも学生も、まずアジア社会の中に入り、体験を積み、アジアを見る目を養っていくという方法の重要性を、認識しているのである。

もちろん東京大学東洋史学研究室が研究対象としているのは、激しい変化の中にある現代のアジアだけではない。そこには、「史記の世界」から「コーランの世界」にいたるまで、多様な文明世界の、古代から現代にいたる歴史が含まれている。東アジア文明の担い手となった中国・朝鮮、いくつもの騎馬民族国家が興亡した内陸アジア、仏教・ヒンドゥー・イスラーム文化が入り組む南アジア・東南アジア、そして古代オリエント文明とイスラーム文明が交錯する西アジア、さらに地中海・イスラーム文明と緊密な交渉を保ってきた北アフリカ・イベリア半島…。これらの地域は約五千年にわたる長い歴史を持ち、膨大な人口と広大な領域を有している。この地域に生きる人々の生活と文化を知ることなしには、世界を理解することはできないはずである。

近代以降の歴史学は、「西洋」＝ヨーロッパを中心にして歴史の理論を組み立て、世界史の展開を理解しようとしてきた。実際、上述の多様な地域を「オリエント」ないし「東方」として一括しようとする発想自体、ヨーロッパ社会の自己認識と表裏をなす西洋起源の考え方である。その意味では、「東洋史学」という枠組みは自明のものではない。「ヨーロッパの眼」でアジアの歴史を見ることは、単にヨーロッパのアジア観をゆがめてきただけでなく、アジアのアジア観をも歪めてきた。そうした見方に、大きな疑問を突きつけてきているのが近年非常に盛んになってきたグローバル・ヒストリーの潮流であるが、同じく東洋史学研究室もそうした見方に安住していない。

では、どのような方法と態度がアジア研究、とりわけ東洋史学研究に必要なのだろうか。そこには、安心して頼れるような確立した「東洋史学研究の方法」があるわけではない。むしろ、それぞれの研究者がそれぞれの方法を模索しながら個性豊かな歴史社会と取り組んでいるところに、現在の東洋史学の面白さがあるともいえよう。しかし、東京大学東洋史学研究室には、長年の伝統が築き上げてきたいくつかの重要な特色がある。

第一は、方法的・理論的関心の強さである。本研究室の歴代の教員は、さまざまな隣接学問分野の成果を積極的に吸収し、自らの方法視角を明示し、相互の批判をも含めて、学界の方法論争のなかで重要な一翼を担ってきた。したがって、本学科に進学する学生にも、方法や理論への強い関心をもつことが要求されるであろう。

第二は、「史料を正確に、厳密に読む」という実証的研究態度である。つまり先人の研究に安易によりかからず、史料と直接に接しつつ、研究方法の妥当性を常に吟味していくという態度が不可欠なのである。そのために中国語・朝鮮語・ベトナム語・インドネシア語など東南アジア諸語、ヒンディー語・タミル語など南アジア諸語、アラビア語・ペルシア語・トルコ語など西アジア・中央アジア諸語などを、習得することが推奨される。ヨーロッパ人の旅行記・伝記・報告書や過去の研究を批判的に利用するために、英語・ドイツ語・フランス語・ロシア語などの読解力も必要となろう。教養学部や文学部には、これらの言語を習得する授業が設けられているので、各人の興味にしたがって必要な言語を学ぶことができる。

第三は、研究対象にタブーを設けていないという点である。歴史学にはふさわしくないと勝手に思い込まれてきた、たとえば絵画・服飾・音楽・料理のようなテーマであっても、それを研究対象として選ぶのを妨げることはない。また、「人と物と思想の東西交流」やアフリカ・オセアニアの歴史も東洋史の研究対象となる。現スタッフでは対応できない場合には、そのテーマにふさわしい研究者を紹介できる力量とつながりを東洋史学研究室は有している。

## 2. 卒業論文について

東洋史学研究室では卒業論文の作成が重視される。それは学生時代に全力を傾けて一つのテーマを追究した体験が、その後の人生に必要であり、かつ役立つと考えるからである。東洋史学研究室の教育の目的は、必ずしも東洋史に関する広い知識を集積することのみにあるのではない。むしろ歴史的情報にじかに接して、自分のものの見方を自力で練り上げてゆく、そうした知的態度・知的誠実さを身につけることが重要なのだ。他人から与えられた器をそのまま使うのではなく、

自分で鉱石を掘り出し、自分の工夫した方法で精錬し、鑄造していこう。その結果できた器がたとえ先人のものより不格好であっても、その体験はきっと貴重な感動を与えてくれるにちがいない。そして東洋史学研究室はそうした態度を高く評価する。

東洋史で卒業論文を書くのは難しいと思うかもしれない。しかし、論文の評価の基準は単純である。自分で生の情報に接し、そこから得られた観察を明晰な言葉で論理的にまとめているかどうか、という点が問われるだけである。真摯に取り組めば、必ず評価される。



### 3. 卒業生の進路

東洋史学研究室の卒業生は、毎年数人が大学院へ進学し、他の多くが企業に就職している。就職先は多様で、大手製造業、銀行などのほか、出版・マスコミ関係もある。公務員を目指すものも少なくない。

### 4. おわりに

東洋史学研究室に進学してくる学生諸君は、講義や演習、先輩や同級生との討論などを通じ、歴史学には様々な方法があり、様々なものの見方があるのだ、ということに実感をもって気づいてほしい。対象地域を深く研究することは、同時に自分のものの見方を確立していく過程でもある。多様な視角、多様な方法相互の対話を楽しみつつ、新鮮な感覚とたくましい意欲をもって、自分の個性的なアプローチを追求されることを期待したい。

また学部時代は、受け身の学習から抜け出し、研究上で自らの問題を見つけだすとともに、これからの長い人生についての重要な選択を迫られる大切な時期でもある。コーチ役・助言者としての教授や助教、先輩や同級生の集まる研究室での率直な交流は、お互いに大きな刺激をもたらすであろう。研究室にはアジア各地からの留学生も少なくない。本郷への進学後は、積極的に研究室に顔をだし、ここを新しい学生生活の拠点としてほしい。

## ○過去2年の卒業論文のテーマ

### 2019年度

- ・ 中華人民共和国における葬儀の変遷
- ・ 19世紀前半ブーシェフルのマズクール家—ファールス地方の在地有力者と諸勢力—
- ・ 『後漢書』「宦者列伝」にみる後漢の宦官の勢力基盤について
- ・ イスラーム世界の普遍史書にみる中国起源論の変遷
- ・ 北宋末期の官箴書『作邑自箴』に見られる地方官の規範意識—胥吏との関係を中心として—
- ・ 現代韓国における「親日派」の形成と実態—植民地期の朝鮮経済人の経歴と「反民族行為処罰法」・「日帝強占下反民族行為真相糾明に関する特別法」の関係—
- ・ 太平洋戦争期における高座海軍工廠と台湾少年工
- ・ 20世紀前半における南方タバコ産業と日本
- ・ 『チャチュナーマ』にみる8世紀初頭ウマイヤ朝のスィンド遠征
- ・ 清末時期における日本への陸軍留学生
- ・ 中華民国時期、『申報』のビール広告にみる健康意識
- ・ 冀東防共自治政府の教育政策
- ・ エチミアズィンのカトリコスと18世紀の東アルメニア
- ・ 『種蕃譜』に見る朝鮮後期の甘藷の栽培・利用方法
- ・ 19世紀イギリス領インドにおける鉄道の軌間論争
- ・ 唐代後期における科挙の名族に対する影響について 弘農楊氏を例に
- ・ 米芾に見る王羲之書法の継承と発展—米芾の王羲之臨書と創作の分析を通して—

### 2020年度

- ・ 陳羣と九品中正
- ・ 秦の軍功爵制について
- ・ 劉邦集団と離反者
- ・ 南京国民政府時期の体育教育
- ・ 象とムガル朝：インド支配拡大期における制度・軍事・儀礼（文学部長賞、総長賞受賞）
- ・ 宋代墓誌に見る隠宅風水の実態
- ・ アッバース朝の都バグダードと『イスラム帝国夜話』にみる10世紀の社会
- ・ 近代中国における「全体主義」概念の受容：1930～40年代の雑誌記事を中心に
- ・ 易地聘礼交渉期の倭学訳官および問慰行の役割：朝鮮時代問慰行研究の一環として
- ・ 1930年代におけるタイ人日本留学制度
- ・ 半両銭の成立及び実態
- ・ 荀子の「礼」の思想と法家の関連について
- ・ ラッフルズと日本貿易計画
- ・ 対災害政策から見る前漢代政治
- ・ 前漢における恩赦の変化
- ・ 近世日本における東南アジア産品：肉桂・麝香の輸入とその利用

※卒業論文の書き方については、ホームページ (<http://www.l.u-tokyo.ac.jp/~toyoshi/index.html>) 内にて、東アジア史、東南アジア史、南アジア史、西アジア史・中央アジア史それぞれの場合を解説しています。一例としてぜひ参照してみてください。

## ○東洋史学研究室の年間行事・研究室の様子

東洋史学研究室では、通常毎年4月に、進学直後の3年生と対象とした合宿がおこなわれます。合宿には教員全員と2〜3名程度の大学院生も参加します。3年生が合宿において自分が興味を持っているテーマについて発表し、それに対して教員や大学院生がアドバイスします。合宿は、研究室に溶け込み、同級生との親睦を深めるよいきっかけになるでしょう（2020年度、2021年度は中止）。

卒業論文の執筆に向けては、ゼミ内での研究指導のほか、毎年6月末または7月上旬に卒論相談会が実施されています。

東洋史学研究室の隣接する東洋史学談話室には、学部生・大学院生が集い、議論を交わしたり、情報を交換したりする交流の場になっています。学部生が大学院ゼミに参加したり、大学院生が学部ゼミに参加したりすることも多いです。このため、総じて東洋史学研究室では学部生同士のつながりが強く、また学部生と大学院生の間の垣根は低いといえるでしょう。非常にアットホームな雰囲気の実験室です。

## 2. 教員紹介

ここでは東洋史学研究室に所属する教員を紹介します。現在、東洋史学研究室には6名の教員が所属しています（うち一人は兼任）。

### 六反田豊 教授（韓国朝鮮文化研究専攻と兼任）

朝鮮中世・近世史を専門とする。これまで朝鮮時代の水運史や財政史・経済史を中心に研究してきた。また10年ほど前から朝鮮時代の海事史研究にも従事しており、朝鮮時代後期を対象に、済州島民の漂流・漂着問題や地方官府の海防体制などについての論考を発表している。最近ではさらにそこから発展して、海や河川などの「水環境」と人間・社会とのかかわりに着目するようになり、共同研究を組織して、漢江流域を主要な対象地として現地調査を進めている。ほかに朝鮮時代の古文書研究や朝鮮時代の国家論・社会論なども手がけている。

著書に、『日本と朝鮮比較・交流史入門 一近世、近代そして現代一』（共編著、明石書店、2011年）、主な論考に、「朝鮮初期における田税穀の輸送・上納期限 一漕運穀を中心として一」（『東洋史研究』64-2、2005年）、「十九世紀慶尚道沿岸における「朝倭未弁船」接近と水軍営鎮等の対応 一『東萊府啓録』にみる哲宗即位年（一八四九）の事例分析一」（井上徹編『海域交流と政治権力の対応』汲古書院、2011年）、「洞春寺所蔵『新編古今事文類聚』紙背朝鮮文書の復元と検討」（宗教法人洞春寺編『山口県指定有形文化財『洞春寺開山嘯岳鼎虎禪師手沢本』保存修理事業報告書』同寺、2011年）、「朝鮮時代の「武」と武臣」（『韓国朝鮮の文化と社会』10、2011年）、などがある。

## 佐川英治 教授

秦漢史、魏晉南北朝史、隋唐史の研究している。近年では、唐の長安城や日本の藤原京・平城京にいたる東アジアの都市プランの系譜を解明し、一方で出土木簡資料や碑文・墓誌などの石刻史料を用いた社会史や軍事史の研究にも取り組んでいる。

著書に『中国古代都城の設計と思想』（勉誠出版、2016年）、『378年 失われた古代帝国の秩序』（山川出版社、2018年、共著）、『中国と東部ユーラシアの歴史』（放送大学出版、2020年、共著）、主な論考に、「北魏均田制の目的と展開」（『史学雑誌』110-1、2001年）、「東魏北齊革命と『魏書』の編纂」（『東洋史研究』64-1、2005年）などがある。

## 吉澤誠一郎 教授

19世紀末から20世紀初めの中国政治社会史、特に天津の歴史を研究している。近代都市社会の形成を民衆運動、ナショナリズムなどの問題と関連づけながら描き出している。最近では、中国の沿海部と内陸部との経済格差の歴史的起源に関心を持ち、内陸中国に頻りに足を運んでいる。

主著として、『天津の近代——清末都市における政治文化と社会統合』（名古屋大学出版会、2002年）、『愛国主義の創成——ナショナリズムから近代中国をみる』（岩波書店、2003年）がある。

## 島田竜登 准教授

東南アジア史・南アジア史を担当している。専門は特に16世紀以降の海域アジア地域の経済史・貿易史である。オランダ東インド会社文書を軸に各種言語の史料を組み合わせることで、多面的な歴史像を描き出すことに関心がある。目下の研究テーマは、バタヴィア（ジャカルタ）都市史、アユッタヤー貿易史、アジア域内貿易史、オランダ東インド会社史、日本・アジア関係史、異文化交流史などであるが、歴史学の方法論やグローバル・ヒストリーについても積極的に発言している。

主著は *The Intra-Asian Trade in Japanese Copper by the Dutch East India Company during the Eighteenth Century* (Leiden and Boston: Brill Academic Publishers, 2006)のほか、日本語・英語による多数の論考がある。また、放送大学では2018年度からテレビ放送授業「グローバル経済史」を担当している。

## 守川知子 准教授

前近代および近代の西アジア史、特にイラクのシーア派聖地への巡礼や、ペルシア語の歴史叙述・学術史、文化交流といった社会史や文化史を専門としている。イスラームに限定されない西アジアの多様な宗教・言語環境に関心を持ち、近年では、近世期の旅行記や回想録といった一人称の叙述史料を用いた研究を行っている。

主著に、『シーア派聖地参詣の研究』（京都大学学術出版会、2007年）、編著に『移動と交流の近世アジア史』（北海道大学出版会、2016年）がある。

### 三浦雄城 助教

中国古代史を専門とする。これまで継続的に研究してきたテーマとしては、漢代に中国王朝の政治思想として確立した儒教と政治の関わりの研究がある。宗教ではないとされる儒教が当時の王権を取り巻く宗教性・呪術性にどのように対応したのかということに注意を払いつつ、特に瑞祥や讖緯とよばれる神秘現象に注目して、当時の政治について解明を行っている。

主な論考に、「前漢宣帝に見る新旧符瑞観の相克 —皇帝と儒教の関係をめぐって—」（『東方学』138、2019年）、「国山碑所見三国江南地域的政治文化」（『魏晉南北朝隋唐史資料』40、2019年）、「後漢光武帝と儒教的讖緯—莽新末後漢初の政治情勢から—」（『東洋学報』101-4、2020年）などがある。

### 3. ゼミ・講義案内

ここでは東洋史学研究室で開講されている講義および演習（いわゆるゼミ）の紹介をします。2021年度は、以下の講義が開講されています。東洋史学研究室所属の教員による講義のほか、毎年他大学から2~3名の非常勤講師の先生によって講義がおこなわれます。

#### ○学部講義一覧（2021年度）

教員名	授業科目名	講義題目	時限	教室
吉澤誠一郎 島田竜登	東洋史学研究入門	東洋史学研究入門	A1+A2・月2	駒場
六反田豊	東洋史学特殊講義Ⅳ	朝鮮神代史論	S1+S2・金2	オンライン
	東洋史学特殊講義Ⅴ	朝鮮前中期曹運研究	A1+A2・金2	オンライン
	東洋史学演習Ⅶ・Ⅷ	朝鮮神代史演習Ⅰ・Ⅱ	S1+S2/A1+A2・金3	赤門723 (ハイブリッド)
佐川英治	東洋史学特殊講義Ⅰ	『三国志』の研究	S1+S2・火4	オンライン
	東洋史学演習Ⅰ・Ⅱ	中国古代史演習Ⅰ・Ⅱ	S1+S2/A1+A2・火3	1416研究室 (ハイブリッド)
吉澤誠一郎	東洋史学特殊講義Ⅶ	近代日中関係史の論点	S1+S2・木1	オンライン
	東洋史学演習Ⅸ	清代漢文史料講読	S1+S2・金4	オンライン
	東洋史学演習Ⅹ	中国近代史料講読	A1+A2・金4	オンライン
守川知子	東洋史学特殊講義Ⅱ	西アジア都市と聖地・聖廟・墓地	S1+S2・月2	オンライン
	東洋史学演習Ⅲ・Ⅳ	西アジア史・中央アジア史演習(1)(2)	S1+S2/A1+A2・火2	オンライン
島田竜登	東洋史学特殊講義Ⅲ	港市国家アユタヤ朝のグローバル・ストーリー	A1+A2・水3	オンライン
	東洋史学演習Ⅴ・Ⅵ	南アジア史・東南アジア史演習(1)(2)	S1+S2/A1+A2・水2	オンライン
赤木崇敏	東洋史学特殊講義Ⅸ	安史の乱後の西域	S1+S2・金1	オンライン
北川香子	東洋史学特殊講義Ⅵ	カンボジア史の諸問題	S1+S2・金3	オンライン
山内和也	東洋史学特殊講義Ⅷ	シルクロードと中央アジア世界	A1+A2・火1	オンライン



## ○演習とは何か

演習（いわゆるゼミ）は、3年次・4年次にそれぞれ必ず通年で単位を修得する必要があります。演習は、東洋史学の研究のための手法を具体的に学び、実践していく場です。多くの演習では、主に研究文献の講読、史料講読、研究報告と論文指導がおこなわれています。**史料講読**では、研究の材料となる史料をどのように読み解いていくかを学びます。**研究文献講読**では、研究書や研究論文の内容や構成の分析を通じて、具体的な研究上の論点を学びつつ、どのような論文の書き方があるのかといったことを身につけることができます。**研究報告・論文指導**では、卒業論文の執筆・完成に向けて、各自の研究内容を報告し、参加者で議論し、内容の修正や今後の研究の方向などについてアドバイスを受けることになります。

## ○演習案内

### 朝鮮時代史演習Ⅰ・Ⅱ（六反田豊教授）

#### ゼミの内容

基本は朝鮮時代の文献史料の講読を行っています。本年度扱っている史料は『朝鮮王朝実録』のうち第9代国王成宗の治績を記した『成宗実録』です。漢文で書かれた史料ですので、発表の際には原文の訓読・現代語訳・語釈が必要とされます。

その他、学部4年生の場合は、夏学期と秋学期にそれぞれ1回程度の卒業論文の構想発表の機会があります。

#### ゼミのための準備

高校卒業程度の漢文の読解能力および初級程度の韓国朝鮮語の読解能力が求められます。

#### ゼミで求められる姿勢

疑問に思ったことは細かいことでも積極的に質問すること、そして、史料が書かれた背景についても考えてみることを望まれます。

#### その他

ゼミは大学院と共通でおこなわれているため、大学院生も受講しており、また、他学部生も参加しているため、様々な角度からの議論が活発に行われています。

### 中国古代史演習Ⅰ・Ⅱ（佐川英治教授）

#### ゼミの内容

漢～宋代を主とする漢文史料講読あるいは当該時代に関連する論文及び研究書の討議が行われています。発表担当は、学生の人数に応じて一学期1～2回程度。4年生を中心に卒業論文指導を夏・秋学期に各1～2回（学生の卒論進捗状況に対応）。

#### ゼミのための準備

発表担当箇所の漢文史料の読解、発表箇所に関連する先行研究の把握、指定された論文や図書の事前の読書。

#### ゼミで求められる姿勢

他の学生の発表に対する積極的な発言、わからないことを主体的に質問・調査していく姿勢。

## 清代漢文史料講読・中国近代史料講読（吉澤誠一郎教授）

### ゼミの内容

基本は夏学期に民国期、秋学期に清代の漢文史料の講読を行っています。先生が順に指名し、音読（or 漢文訓読）の後、解釈を述べ、内容を議論します。一学期の中で、指定された論文（日本語が多いが、中国語の場合もある）についての議論を行うことが数回あり、その際は、学生が順にコメントや疑問点を述べ、先生がそれに答える形で議論が行われています。卒業論文の構想を報告する機会は学期に1回程度あります。

### ゼミのための準備

史料講読のための予習。最低限、音読・解釈のための予習が求められ、『大漢和辞典』といった工具書類を利用することが必要になります。

### ゼミで求められる姿勢

議論への積極的な参加が望まれるので、毎回の予習を欠かさず、わからない事項についてはなるべく事前に自分で調べておくことが必要です。

### その他

中国語を第二外国語として選択していない場合は、できるだけ早いうちに基本的な文法事項を学び、発音なども練習をしておくことが望ましいです。ゼミ内で卒業論文の構想を報告する機会は少ないですが、先生には卒業論文に関する相談に快く応じていただけます。先生との相談も踏まえて、自分で計画を立てて執筆を進めていくことが重要です。

## 西アジア史・中央アジア史演習（1）・（2）（守川知子准教授）

### ゼミの内容

基本的には、毎回参加者の一人が担当となって、自身の関心に沿って選択した英語論文の講読が行われています。秋学期には、4年生の卒業論文指導も行われます。

### ゼミのための準備

学期毎に1~2度、自分の担当する回があるので、関心のある英語論文を選択することが必要です。発表の前週には、選択した論文をゼミ参加者に配布します。ゼミ内での報告のために、論文の内容をまとめたレジュメを用意することが必要になります。

### ゼミで求められる姿勢

他の参加者が担当する回でも、講読対象の論文を参加者全員が読んでくれることが前提となっています。また、毎週のゼミ内で、一度は発言することが求められます。

## 南アジア史・東南アジア史演習（1）（2）（島田竜登准教授）

### ゼミの内容

3年生は自分の関心に沿った研究論文の講読、4年生は自身の卒業論文についての研究報告が中心となります。年度によっては、論文集や研究書の輪読が実施されます。

### ゼミのための準備

自分が関心を持っているテーマの先行研究を把握しておくこと、他のゼミ参加者が講読する論

文を事前に読んでおくこと、自分の研究報告に向けた史料探しやこれまでの自身の研究内容をまとめることが必要です。

#### ゼミで求められる姿勢

特別な事情がない限りは必ず出席し、討議の際には積極的に意見や質問をすることが求められます。

#### その他

南・東南アジアを主な研究対象としたゼミですが、江戸時代における日本の外交から、アジア内におけるヨーロッパ人の貿易など、テーマについては多様な選択肢があります。

## 4. 履修の手引き

東洋史学研究室への進学にあたり、進学内定後の2年次のA1・A2セメスターから後期課程の単位修得が可能になります。3年次の終わりから4年次にかけては就職活動や卒業論文の執筆があり、想像する以上に多忙なスケジュールを送ることになる人も多いでしょう。ですから、早め早めに必要な単位は修得することを推奨します。

#### 卒業要件

文学部を卒業するためには、東洋史学専修課程が定める必修科目48単位を含めて76単位以上を修得することが必要です。

#### 必修科目 (48 単位)

文学部の各専修課程では、必修科目が定められています。東洋史学専修課程の必修科目は、次の48単位です（括弧内が必要単位数）。

史学概論 (2)、東洋史学研究入門 (2)、東洋史学特殊講義 (16)、日本史学特殊講義 (4)、西洋史学特殊講義 (4)、東洋史学演習 (8)、卒業論文 (卒業論文の指導を含む) (12)

このうち、「史学概論」と「東洋史学研究入門」は、毎年A1+A2セメスターに駒場でのみ開講されるため、2年次に必ず修得しておいた方がよいでしょう。

また、前記の学部講義一覧に示されているもののほかに、以下の講義も「東洋史学特殊講義」の単位として認定されています。

#### 2021年度「東洋史学特殊講義」認定科目

陳捷「中国思想文化学概論Ⅱ」、横手裕「中国思想文化史概説Ⅰ」、小野寺史郎「中国思想文化学特殊講義Ⅱ」、下田正弘「インド哲学Ⅱ教学演習Ⅳ」、藪内聡子「インド哲学Ⅱ教学特殊講義Ⅳ」、外川昌彦「宗教学宗教学史学特殊講義Ⅵ」、池内恵「イスラム学特殊講義Ⅰ」、菊地達也「イスラム学特殊講義Ⅱ」、西秋良宏「考古学特殊講義Ⅺ」、荻原裕敏「言語学特殊講義ⅩⅢ」、梶原三恵子「印度語学概論Ⅰ」、金賢貞「韓国朝鮮文化特殊講義Ⅷ」、高津孝「文化交流特殊講義Ⅴ」

※詳しくは文学部HPの「文学部便覧(抜粋)」もしくは「授業科目一覧」を参照。

### 持ち出し専門科目について

2年次のA1+A2 セメスターで履修できる後期課程の科目を「持ち出し専門科目」と言います。上記の駒場で開講される「史学概論」と「東洋史学研究入門」の他に、本郷では島田竜登准教授による東洋史学特殊講義「港市国家アユタヤ朝のグローバル・ヒストリー」が持ち出し専門科目となっており、2年次に受講が可能です。

### 語学について

文学部では、様々な言語の授業が開講されています。進学後、自分の対象とする地域、研究分野によっては、必要に応じた語学を履修するのもよいでしょう。

## 5. 留学体験記

東洋史学研究室では、大学院生はほぼ全員が語学や史料収集のために長期（多くの場合で1～3年間）に亘って海外に留学に行きます。また、近年では、全学交換留学制度などを用いて、学部生の段階で海外留学をする人も少なくありません。皆さんの中にも留学に関心がある方も多いと思います。先輩たちがどのような目的で、どのような手段で、どのような国に留学に行ったのかを知ることは、大いに皆さんの参考になるでしょう。ここでは、学部生の留学経験者の体験記を紹介します。

### Mさん（2018年度進学、留学先：コペンハーゲン大学、留学年次：4年）

私は2019年9月から2020年の2月まで、デンマークのコペンハーゲンに留学していました。私の留学の目的は、第1は英語能力、特に話し書く技術を向上させること、そして第2は、今後大学院に進学し本格的な留学を行うための予行練習です。元から留学の希望はあり、先生の勧めや説明会への参加がきっかけとなりました。今回利用した全学交換留学制度で第1志望の大学が定員いっぱいとなり、第2志望の大学に決定しました。このように、予定とは少し異なった形での留学となりましたが、得た学びは大変大きく、留学の効果と、また限界を知ることができたと思います。交換留学であったことで、JASSOから奨学金を頂き、不安の多かった手続き面でも多くの助言を受けました。ただ、交換留学ゆえの不満もありました。専門的なクラスはデンマーク語が必要なこともあり、交換留学生在が選択できる授業は非常に限られています。結局、英語作文と近代インドの歴史の授業を履修し、加えて北欧神話学の授業を聴講しました。目標である英語能力の向上は、授業のみでは不足を感じましたが、友人たちが議論を交わす空間にいて刺激を受け、拙いながらも英語を使おうと意識するうちに多少の上達を得ました。寮や、授業、日本語学科の学生たちとも食事会など様々な交流ができました。自分から大小の目的を設定し動かなくては、学習面でも生活面でも機会を活かせないと教えられた半年間になりました。

### Kさん（2019年度進学、留学先：ダラム大学、留学年次：3年）

私は、イギリス北部・ダラム大学というところに留学していました。ダラムは北イングランドで、ロンドンから電車で4時間半、「ハリー・ポッター」に出てくるような校舎が特徴的です。留学期間は、本来は2019年4月～2020年6月だったのですが、新型コロナウイルス感染症拡大を

受けて2020年4月に帰国しました。留学中は、専攻と異なりますが、国際政治学を中心として履修を組みました。(International Relations, Politics of Pacific Asia, Special topics of US politics, Leadership)

私が留学に踏み切った理由は3つあります。1つ目は、高校の時に留学をしてから、海外で、一人で暮らし学びたいという漠然とした思いがあったからです。2つ目は、大学に入学してから東京大学に来ている留学生と関わる中で、彼らのように異文化を体験したいという多があったこと、3つ目は社会的マイノリティになる経験をしたかったということです。この3点は、交換留学で満喫することができました。

最近では、現地に行かなくても Coursera (注: オンライン動画学習ツール) などで海外の授業を受講することはできます。しかし、実際に社会で生活することには大きな醍醐味があると感じますし、それが私の得ることができた経験でした。陳腐ですが、私が得ることができたものは2つあります。

1つ目は仲間です。私は留学に行く前から東京大学に来ている留学生と仲良くなったり、JISS という団体に属し、日本から留学に行く仲間と知り合っていました。留学で辛い時や、新型コロナウイルス感染症により緊急事態に陥った時、互いに協力して乗り切ることができました。留学と言うと一匹狼で頑張る必要があるという考えもありますが、適度に自分のホームと思える場所を現地に持っていくことも、長期的に見て留学を充実させることになると思います。留学中も音楽やダンスが得意でしたので、そのような課外活動を通してとても仲の良い友達を作ることができました。とにかく試してみることが大切であると思います。

2つ目は勉強への姿勢です。ダラム大学にはオフィス・アワーが設定されており、わからないことは教授に直接聞くことができます。基本的に授業のリーディング量が多すぎて忙殺されていたので、私はかなり通い詰めていました。聞くことを恐れない姿勢を身につけることができたと思います。英語面でも、スピーキングよりもリーディング力が大きく改善されたと思います。

以上は私の経験であり、皆さんにはそれぞれの留学の意味と目標があると思います。自分の軸を大切に自分に向き合うことができれば、とても心に残る留学になるはずです。是非挑戦してみてください!

## 問い合わせ先

〒113-0033

東京都文京区本郷 7-3-1 法文2号館 1階 2119室

メールアドレス: toyoshi@l.u-tokyo.ac.jp

電話番号: 03-5841-3781

ホームページ: <http://www.l.u-tokyo.ac.jp/~toyoshi/>

表紙背景: フマーユーン廟 (デリー)